

ケーラー 『中世並びに近世ドイツにおける衣服の発展』個々の衣服の一般的製作法のために、特に昔の仕上げを考慮した、歴史家、芸術家、舞台演出家、衣装係及び衣服製造に携わる産業家のための手引書・指導書 全2巻

**Köhler, Karl. Die Entwicklung der Tracht in Deutschland während des Mittelalters und der Neuzeit**, mit besonderer Berücksichtigung der jezeitigen, für die einzelnen Kleidungsstücke üblichen Herstellungsweise. Ein Hand- und Lehrbuch für Historiker, Künstler, Bühnenleiter, und Garderobiers, sowie für Gewerbefreibende, welche sich mit Anfertigung von Bekleidungsstücken beschäftigen. 2vols. Nürnberg, F. Heerdegen, 1877. 22.8×15.6 cm <383.134-K-1~2>

Hiler p. 505 Colas 1636 Lipp. 590

本書において著者が試みたものは、中世及び近世のドイツにおいて着用された衣服中、発展史上重要と思われるものを個別的、部分的に解明するという新しい研究法で考察したことである。近代になって、衣服に関する著作が比較的多く刊行されているが、このことは衣服の基礎的な知識が要求されているばかりではなく、まだ十分に解明されない分野が存在することを物語っている。これまでの服装学の研究は、衣服を包括的に考察する方法を多く用いていたが、多様な要素から構成される衣服をそうした方法により調査研究することは困難であり、正確に把握することも望めない。そこで、個々の衣服形体やその発展過程及び技術を解明するために衣服の個別的、部分的考察が必要になってくる。これまで技術に関しては、あまり顧慮されずにきたが、古来からの技術を再考することによって、これらの知識を広め、衣服製造に携わる技術者の創造力を豊かにすることもできる。この新しい研究法は衣服の創造活動という服装学の新分野を開拓し、舞台衣裳家、産業家などへの活用も可能となろう。

本書では、個々の衣服形体の変遷や当時の裁断技術についても、できるだけ正確に示している。説明用の挿画も実物に基づいて作画されたものや、絵画に描かれていたものを忠実に再現している。しかし、著者は「資料の十分な調達が望めない今日、本書においても完璧を求めることは無理であろう」と述べている。

ケーラー（1825—1876）はドイツ、ヘッセン州ダルムシュタット生まれの歴史画家であり、図解篇にある100枚の図版には自筆挿画550点を収めている。第1巻は解説篇、第2巻は図解篇、内容は、1章は衣服 2章 髪飾りとかぶり物 3章 衿飾りと頸飾り 4章 婦人服 5章 個別服となっている。ケーラーには他に『600の絵と裁ち方による実用服装学』Praktische Kostümkunde in 600 Bildern und Schnitten 全2巻 <383.1-K-1~2> 1926年ミュンヘン刊、およびジヒアルト女史によって補填された、同書の英訳本 A history of costume <383.13-K> 1928年ロンドン刊がある。（平井）